

ではないことになる。

<注13> このことは、実際にヲ格名詞句として具現したものの機能と動詞が要求する機能とが異なることがあるということを含意する。

<注14> cf. 久野1973。

<注15> (93)は、「国境の長いトンネル」を経由点と

して解釈することも弱いながらもできそうである。

言語経歴：1958年11月 東京都豊島区生 3
歳～ 埼玉県朝霞市
(東京都立大学大学院学生)

のぞく(覗)・うかがう

大島 資生

1. はじめに

(1) 敵の様子を のぞく。

(2) 敵の様子を うかがう。

「のぞく」と「うかがう」という動詞は、どちらも「ひそかに見る」という意味をもっている。本稿では、この「ひそかに見る」という意味を中心として、両者の違いを探ってみようと思う。

なお、「のぞく」には「えりから下着がのぞいている」といった自動詞としての用法もあるが、ここでは他動詞としての用法にかぎって分析をすすめる。

2. 辞書の記述

「のぞく」 ①間を隔てる障害をとりのけて見る。かいまみる。様子をうかがう。②わずかに一部分だけを見る、または知る。③高い所からからだをのりだして見おろす。

「うかがう」 ①のぞいて様子を見る。そっと様子をさぐる。②ひそかにつけ入るすきをねらう。時期の到来を待ち受ける。③手がかりを求めて調べる。④いちおう心得ておく。(『広辞苑第三版』)

「のぞく」 ①すきまや穴を通して向こうを見る。②ひそかに様子を見る。うかがい見る。また、他人の隠し事や秘密などをそっと見る。③ちょっと見る。ざっと見る。ちょっと立ち寄って見る。④身をのりだして低い所を見る。見おろす。また、首をのばすようにしてそれを見る。

「うかがう」 ①物のすきまなどから、そっと様子をのぞき見る。また、それとなく様子をさぐる。②ひそかによい機会の来るのを待つ。③調べ求める。調べ捜す。④物事の

一端を知る。一応様子を見る。(『国語大辞典』)

両者の記述についての細かいコメントは、分析の中で適宜述べるが、二つの辞書で見比べてみても、二語の決定的な違いは見出せないようである。また、他辞書についても、ほぼ同様の記述であった。

3. 分析

3.1. 主体

(3) スパイが 敵陣の様子を のぞく。

(4) スパイが 敵陣の様子を うかがう。

(5) *望遠鏡が 敵陣の様子を のぞく。

(6) *望遠鏡が 敵陣の様子を うかがう。

(5)(6)は比喩的用法以外では不適格である。したがって、一般の用法において主体はどちらも有生物にかぎられるようだ。

3.2. 対象

(7) ドアのすきまから 彼の部屋を のぞく。

(8) ?ドアのすきまから 彼の部屋を うかがう。

(9) ドアのすきまから 彼の部屋の様子を のぞく。

(10) ドアのすきまから 彼の部屋の様子を うかがう。

(11) 窓を のぞく。

(12) *窓を うかがう。

(13) 窓の奥を のぞく。

(14) 窓の奥を うかがう。

(15) 望遠鏡を のぞく。

(16) *望遠鏡を うかがう。

(17) 望遠鏡で 敵陣を のぞく。

(18) 望遠鏡で 敵陣を うかがう。

(19) 望遠鏡で 敵陣の様子を のぞく。

(20) 望遠鏡で 敵陣の様子を うかがう。

「のぞく」「うかがう」という行為の対象となるのは「事物の状態・様子」である。また、それはしばしば(7)~(10)のように「何らかの障害物によってさえぎられて直接見ることができないもの」である。

ところが「のぞく」の場合、感覚のはたらく——つまり見る——対象がヲ格にあらわれない場合がある。(11)(15)がその例である。ここでは「窓」「望遠鏡」がヲ格をとっているが、実際に目で見るのは「窓」や「望遠鏡」ではない。(11)(15)が不適格ではないのはそれぞれ「窓ごしに ~を のぞく」「望遠鏡で ~を のぞく」というような読み込みが生じるからだろう。一方(12)(16)が不適格であることから、「うかがう」ではそういった読み込みができないことがわかる。

さて、今度は次のような例を見てみよう。

(21) *通りを隔てた建物の窓の奥を のぞく。

(22) 通りを隔てた建物の窓の奥を うかがう。

(21)は望遠鏡や双眼鏡などを使わない場合は不適格である。つまり、「のぞく」は対象と主体の距離が(21)(22)のように大きい場合には使いにくく、望遠鏡などの道具で、その距離を「縮める」ことが必要になる、ということがわかる。「うかがう」にはそのような制約はない。もう一つ、次の例について考えたい。

(23) となりの人の答案を のぞく。

(24) *となりの人の答案を うかがう。

(25) 試験場で となりの人のでき具合を のぞく。

(26) 試験場で となりの人のでき具合を うかがう。

(23)~(26)は行為としてはほとんど同一のことを表そうとしている。にもかかわらず(26)が適格、(24)が不適格であること、さらに、(8)も不自然であることから、「うかがう」はヲ格に「答案」(8)の「彼の部屋」のような具体的な「目に見えるもの」はとりにくく、もっぱら「でき具合」や(10)(20)にみられる「~の様子」といった「事物の状態」をとるということがわかる。

3.3. 用いる感覚

1.で「のぞく」と「うかがう」の共通する意味として「ひそかに見る」ということを挙げた。両者についての辞書の記述でも、最初に挙げられているのは「見る」意味である。では次のような例はどうだろう。

(27) *耳をそばだてて 隣室の様子を のぞく。

(28) 耳をそばだてて 隣室の様子を うかがう。

「うかがう」はこのように、視覚だけではなく、聴覚

を用いる場合もある。

(29) *先生のごきげんを のぞく。

(30) 先生のごきげんを うかがう。

「先生のごきげん」は実際に目で見ること、手で触れることもできない。「先生」の顔色(視覚)、声の調子(聴覚)といったものの他、動物的カンで感じとる雰囲気といったものまで総合しなければわからないのである。これに対し、(27)からもわかるように「のぞく」は常に視覚がかかわる場合にかぎられるようだ。

(31) 研究室の様子を のぞく。

(32) 研究室の様子を うかがう。

この場合の「のぞく」は『広辞苑第三版』の①、『国語大辞典』の③にある用法である。「のぞく」の場合、通りがかりに顔をドアの方に向けてちょっと見る、ドアから首だけをちょっと中へ突っ込んで見る、あるいはごく短時間だけ立ち入って見るということの意味するのであり、視覚だけを用いる。これに対し、「うかがう」という行為は、必ずしも視覚だけを用いるとはかぎらず、五感を総動員して中の様子をさぐるということなのである。「うかがう」という行為は全感覚的であるといえよう。

3.4. 感覚の向けられる方向

3.4.1. のぞく

「のぞく」の場合、用いる感覚は前節で述べたとおり、もっぱら視覚である。そして視線というものは常に直線で単一なので、感覚の向けられる方向は、直線的で一方方向ということになる。

3.4.2. うかがう

「うかがう」は前述のとおり、視覚以外の感覚を用いることもある。そこで、たとえば聴覚や嗅覚について向けられる方向を考えると、それは単一ではない。これらは、一度にあらゆる方向にむけることのできる感覚である。したがって「うかがう」については、全方位的であると考えられる。特に、後述する「好機をまちうける」という意味をもつ場合に、この全方位的という特徴が顕著にあらわれる。

3.5. 感覚のおよぶ範囲

(33) 一つの女の顔が……(中略)……私たちの方を窺うようにしていた。

(堀辰雄『旅の絵』『燃ゆる頬・聖家族』新潮文庫p.140)

この文の「うかがう」を「のぞく」におきかえて比

べてみよう。

(34) 一つの女の顔が……私たちの方をのぞくようにしていた。

「うかがう」の方は「私たち」の姿を見るだけでなく、「私たち」の雰囲気などもさぐろうとしているように感じられるのに対し、「のぞく」では「私たち」の顔色・表情・動作といった細かい点を見ているように思われる。つまり、「のぞく」の方が「うかがう」よりも感覚のおよぶ範囲——ここでは視野——が限定されているように感じられるのである。

(35) 葦の髄から 天井を のぞく。

ということわざがあるが、これについての鈴木・広田(1956)の解説は「のぞく」の上記のような特徴を端的に示していると思う。

よしの莖の管で天井を見ても、全体を見ることができない。(p.940) (下線筆者)

では、「うかがう」の場合の感覚のおよぶ範囲はどうだろう。

(36) ぼくは亀の子みたいに首をのぼして、しばらく里見の屋敷の様子をうかがったが……

(赤川次郎『名探偵はひとりぼっち』角川文庫 p.141)

この場合、「ぼく」は視野のさまたげ(以下では「障害物」と呼ぶことにする)がなくなるところまで、頭を何か(石垣? 壁?)の上に出して見ている。そして見ているのは「里見の屋敷」全体の様子なのである。このことから「うかがう」には感覚のおよぶ範囲の限定ということが全くないか、あるいは、あっても「のぞく」よりもずっと少ないと考えられる。

「のぞく」はものの部分に対して感覚をはたらかせる行為であり、「うかがう」は全体に対しての行為なのである。

3.6. 障害物

ここでは、前節において若干触れた「障害物」という概念について、もう少しわしく考えてみたい。

(37) 腹をすかせた狼たちが じっと こちらをのぞいている。

(38) 腹をすかせた狼たちが じっと こちらをうかがっている。

(37)と(38)とを比べてみると、(37)では「こちら」からは「狼」の「眼」(ないし「頭」)だけが見えているように感じられるが、(38)では今にも飛びかかって来そうな「狼」の四肢までがはっきりとイメージされる。つまり、「のぞく」については、「狼」と「こちら」の間に何らかの

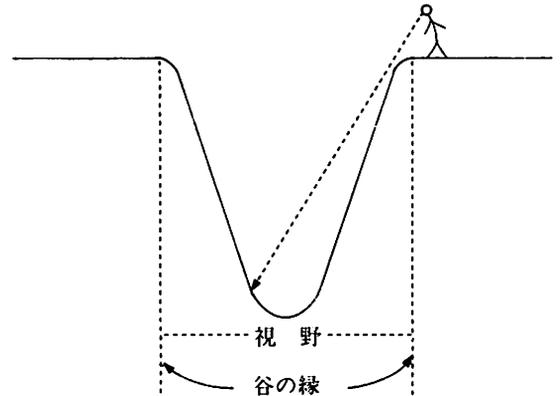
「障害物」があって「狼」はその「障害物」のすきま(あるいはそれに類したもの)から眼だけで「のぞいて」いるように感じられるのである。^(注2)

ところで、このように「障害物」に「すきま」や「穴」等がある時、その「障害物」は「視野を限定する道具」としてはたらくことがある。望遠鏡や顕微鏡などを「のぞく」という場合はその典型的な例である。このことをふまえて次の例を考えてみよう。

(39) 谷底を のぞく。

(40) あちこちの店を のぞく。

これらの例では、「障害物」が存在していないように思われる。まず、(39)は『広辞苑第三版』の③、『国語大辞典』の④にあたる用法であるが、ここでは、「谷」を一つの「大きな穴」ととらえているのではないかと考えられる。つまり、図に示したごとく、「谷の縁」が



「視野を限定してくれる道具」となっている。(40)の場合も同様にして、店の戸口あるいはショーウィンドーの枠が「視野を限定する道具」としてとらえられているのである。以上のことから、「のぞく」の場合必ず「障害物」——視野を限定するもの——が存在するといえる。^(注4)また、3.5.で「のぞく」は「ものの部分に対して感覚をはたらかせる行為」と述べたが、これは、「障害物」の存在ということと密接に結びついているといえよう。

一方、「うかがう」は必ずしも「障害物」の存在を含意しないのである。

3.7. 対象への接近

3.2.で(21)(22)の例文を比較し、「のぞく」は「うかがう」よりも、主体と対象の距離が小さい方が使いやすい、と述べた。また、これまで挙げてきた例文のうち「のぞく」も「うかがう」も使えるもの((1)(2), (3)(4), (31)(32), (37)(38)等)でそれぞれ二者を比較してみても同様のことが言える。これらの場合、「のぞく」は目を対象に

近づけるという動作を伴っていると考えることができる。ただし、(31)については、前述の通り、顔を対象の方に向けるだけという場合もありうる。これらをまとめると、「のぞく」は、顔を対象の方に向ける、目を近づける等の「より明瞭に見るための動作」を必ず伴うと考えられる。

(『国語大辞典』の④にある「身をのりだして」「首をのばすようにして」などもその例である。)

(1) ?その言動から 彼の心の内が のぞかれた。

(2) その言動から 彼の心の内が うかがわれた。

この例文は、「のぞく」という行為が「より明瞭に見るための動作」を伴わずに自然になされるようには言いくいということを示している。

一方、「うかがう」は必ずしも「より明瞭に見るための動作」を伴うとはかぎらず、表面的にはきわめてひかえめな消極的行為のように見えることが多い。しかし、「うかがう」は全感覺的かつ全方位的な行為なので、主体の内部・精神面においては、対象について何らかの情報を得ようとする意識が「のぞく」よりもずっと強くはたらいっている場合がある、ということを指摘しておきたい。

なお、「うかがう」の表向きの消極性ということは、「うかがう」が謙讓語としても用いられることとも関連するように思われる。

(3) 私が 先生のお宅へ うかがいます。

(4) 私が 先生のお宅へ まいります。

(5) お話を うかがう。

(6) お話を お聞きする。

(4)(6)が話者中心の表現のように感じられるのに対し、「うかがう」を用いた(3)(5)は敬う相手を中心とした表現のように感じられる。さらに、この用法は3.2.で取り上げた主体と対象の距離とも関係するのではないだろうか。すなわち、相手に対して距離をおくということは相手に対する敬意のあらわれの一つとみなすことができるということである。そのことから主体と対象との距離が比較的大きい「うかがう」が謙讓語として用いられるのであろう。

3.8. 「好機をうかがう」という用法について

前述のとおり「うかがう」には「のぞく」と共通して「ひそかに見る」つまり「自分が見ている動作を人に知られまいとしている」という意味がある。また、「うかがう」には辞書にも記述があるとおり、「時期をまちうける」というニュアンスもある。

(7) 息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。

(芥川龍之介『羅生門』)

(48) 単身敵陣を窺ってあはよくば単干と刺違へる所存に(略)

(中島敦『李陵』 以上二例は国立国語研究所1972(p.326)による)

「のぞく」にはこのような意味はない。国語辞典では「そつと見る」「時期を待ちうける」という二つの特徴を互いに対立するものとして扱い、別々の項を立てている(『広辞苑第三版』の①②、『国語大辞典』の①②を参照)。この二つの意味の関係について次のようには考えられないだろうか。つまり、「好機をまちうける」場合には必ず「ひそかに」見る、聞くなどして情報を収集するが、「ひそかに」見ているときがいつも「好機をまちうけ」ているときであるとは限らない。一言でいえば、「うかがう」には常に「ひそかに感覚をはたらかせる」という意味があり、それに時として「好機をまちうける」という意味が重なる、ということである。

4. まとめ

	のぞく	うかがう
主 体	有	生 物
対 象	目に見える事物	事物の状態
用いる感覚	視 覚	あらゆる感覚
感覚の向けられる方向	一方向・直線的	全 方 位
感覚のおよぶ範囲	対象の部分	対象の全体
障 害 物	必ず存在	必ずしも存在せず
より明瞭に見るための動作	必ず伴う	必ずしも伴わない
「ひそかに感覚をはたらかせる」という意味	必ずしももたない	必 ず 有
「好機をまちうける」という意味	な し	時としてもちうる

最後に「のぞく」と「うかがう」の特徴を簡単にまとめてみる。

のぞく：障害物にある「穴」(に類したもの) ないし、視野を限定するもの(望遠鏡など)に接近したり、顔をそちらの方へ向けたりにして、そのむこう側にある対象を見る。

うかがう：ひそかに、様々な感覚を用いて対象の状態を知ろうとする。(接近等の動作は伴わないことが多い。)また、派生的に「好機をまちうける」という意味をもつこともある。

<注1> (18)で、ヲ格が「敵陣の様子」のような「状態」を表す語でなくてもそれほど不自然ではないのは、「敵陣」という語に「様子」ということまで読み込むことができるからであろう。

<注2> 「障害物」は前節で述べたように、感覚のおよぶ範囲(主に視野)を限定するものであると

時に、「のぞく」ないし「うかがう」主体の姿を対象もしくは第三者に見られないための道具」ともなりうる。

<注3> (39)(41)はいずれも、「のぞく」と「うかがう」の共通する意味として最初にあげた「ひそかに見る」という意味をもたない例でもある。

<注4> 『広辞苑第三版』の「のぞく」についての記述で、「間を隔てる障害をとりのけて見る」というものがあるが、他の辞書を見ても同様の記述は見当らず、また筆者自身今のところそのような用法に出会ったことがない。「除く」と混同してしまったのだろうか。

<注5> したがって、3.2.で述べた主体と対象との距離の差は、目の接近の有無から生じた余剰的特徴と考えられる。

言語経歴：1963年1月豊島区生現在に至る。
(東京都立大学学生)

日本語の「むすぶ」「つなぐ」と中国語の「系」「結」「接」「連」

閻 小妹

1. はじめに

小稿では、日本語の「むすぶ」「つなぐ」と中国語の「系」「結」「接」「連」を比較分析してみたい。

まず『岩波国語辞典第三版』の「むすぶ」と「つなぐ」の記述を次に示す。

「むすぶ」①つなぎ合わせる。②糸・ひも等の端を組んで締め、離れないようにする。③二つ以上のものをつなぐ。④固く閉じる。⑤まとまった状態にする。⑥締めくくりをつける。⑦構えつくる。⑧ある状態やまとまりを生ずる。

「つなぐ」①ひも・綱などで物を結びとめて離れないようにする。結びとめる。②離れているものを一つに結ぶ。③長く続けて絶やさないようにする。もちこたえる。

次に『新明解国語辞典第三版』の記述を示す。

「むすぶ」⊖一定の手順に従って、一体化された・(今まで無かった新しい)状態を作る。⊖あ

る結果を生じる。

「つなぐ」⊖継いだりひも・綱などで結わえたりして一続きにし、解け離れないように・する(しておく)。⊖[同類のものを]結びつけて、(長く)一続きの物にする。⊖離れている物を結びつけて、互いに・意志が通じる(連絡がとれる)ようにする。⊖[とぎれそのような物を]なんとか持ち続くようにする。

次に、二語に対応すると思われる中国語の「系」「結」「接」「連」についての『現代漢語辞典』『漢日辞典』の記述をまとめて記しておく。

系① 打結、扣。(結ぶ、締める)

② 栓、綁。(つなぐ、しばる、くくる)

③ 把人或東西捆住后往上提或向下送。(ひもやなわでつるす)

結① 在条状物上打疙瘩或用這種方式制成物品。(結ぶ、ゆわえる、くくる、編む、すく)

② 凝聚。(固まる)

③ 結束。(結末をつける)